

岩内報

39号

2014.3.31

窪島父子と石屋と

菊地 大

「核」を

絵筆で塗りつぶせ

ペンで書きあらためよ

水上 勉

窪島誠一郎

窪島誠一郎さんと一緒に岩内を訪れてから、ふた冬目を迎える。その碑はまだ建っていない。

昨年の秋、窪島さんは札幌から無言館の支援者の車でやって来て、ぼくを余市駅で拾ってから岩内へ向かった。窪島さんには数年前に余市で講演をもらったが、その時

「妻は岩内の出身で、親に結婚の許しを得に行ったが、ひどい吹雪の日であった。小樽から先、汽車もバスも出ないと言うので、金星ハイヤーに乗って余市という町を通った覚えがある」

と言った。ぼくは助手席で、その時のことをあれこれと考えていた。

そのひと月ほど前に窪島さんから、「泊原発が目の前に見える岩内の丘に、反原発の碑を建てたいのだが、石屋を世話してくれないか」という電話があった。石屋と言わ

れても、石屋に知り合いがあるわけ

ではないが、ぼくは承諾した。そして石屋に親しそうな人に相談したり、札幌の知り合いの葬儀屋に相談したりしたが、そんな大きな石を遠くから運ぶのは、それだけで結構な費用がかかる。地元の石屋に相談するのがいいということになって、ぼくは岩内のOさんに万事を託した。

そして、ひと月後、窪島さんから電話があった。

「明日、札幌で講演をする。明後日、そちらに行きたいがどうか」

と言うことであった。翌日は、ぼくも札幌に出る予定があったので、講演会場で会うことにした。

そのとき渡されたのが冒頭の碑文である。

「石の大きさは？」

と聞くと、部屋の入口まで行って

「このくらい」

と、ドアの3分の2ほどに手を広げて見せた。そして、裏には次のよ

うに由来を刻むという。

「われら父子は太平洋戦争の混乱の中で離別し、戦後三十余年を経て奇跡の再会をした。時に父五十八歳、子三十五歳。父水上勉は、故郷若狭に群立する原子力発電所の存在を批判し、子窪島誠一郎は信州上田に戦没画学生を慰霊する美術館「無言館」を建設した。父の代表作「飢餓海峡」の舞台であり、子の妻紀子の郷里岩内の丘に、『三行の希い』を刻んだ一碑を建立する。建立者 窪島誠一郎」

岩内に素晴らしい碑が建つ。ぼくはそれを見せてもらった時からわくわくしている。

さて、石屋である。岩内ではOさんが2軒の石屋に予め連絡をとっていてくれたので、それぞれ刻字する石の見本などを用意して待っていてくれた。窪島さんは熱心に計画を説明し、石屋さんも場所などを詳しく確認して、かなり話はすすんだ。ひ

とりの石屋は、

「その場所に適当な石が埋まっているはずだ」

とも言った。後は各々現地を見た上で改めて相談ということになったので、ぼくは、そこで窪島さん達と別れて帰った。ぼくの協力は、そこまでであった。

その後、現地から適当な石も見つかり、いよいよ着工というところの問題が起きた。

土地は窪島さんが大分以前に買い求めていたものだが、何分にも岩内と長野県。測量や手続きの一切を前所有者と不動産屋に任せていた。着工に当たって役所から図面を取り寄せてみて窪島さんは驚いた。碑を建てる予定地は確かに敷地内になっているが地形が契約と違う。窪島さんには構想があった。石碑の傍を子どもの遊園地にする。そこに絵本を置いた子どもの家を建てる。窪島さ

んの予定ではそれが充分可能な場所だったが、図面はそうなっていない。前所有者と話し合ったが、契約時の使用目的と違ふとか何とか言つて埒が明かない。そんなことで2度目の冬を迎えてしまった。

そんな時、ぼくは水上勉の作品の中に『石屋の音』という短篇を見た。

少年がいつも学校に通う道筋に石屋があつて、親父さんが何時もこつこつと石を刻んでいた。雨の日も石置き場の隅のタモの小かげのトタン小屋で、こつこつ石を刻んでいた。御影石や大理石の墓石が、立ったり寝転んだりしていた。陽が照ると「光がそこでざわめいた」という。少年より3つ年上で絵の上手な庄吉は、その石屋の息子であった。何時の頃からか、庄吉も親父さんと並んで石を刻むようになった。こつこ

つ、こつこつ、ふたりは黙って石を削っていた。小さい時から禅寺に預けられ、寺から学校に通っていた少年は、その光景がとて眩しく羨ましかった。

しかし、庄吉は石屋の跡を継がずに、東京に出て彫刻家を目指した。

そして、少年が19歳で寺を出て村に戻った時には、庄吉は既に文展で特選入選を果たしていた。「逆風」というその作品は、風に向かつて立つ力強い若者の等身大の裸像だった。その後、庄吉は2度目の特選を受けるのだが会うこともなく過ぎた。

その庄吉がニューギニアで戦死したという話を聞いたのは戦後であった。舞鶴の友人宅に庄吉の作品が残っていると聞いた。30歳に近づいた少年が、そこで見たのは見事な女性の石膏像だった。庄吉は村の女性と結婚したが、結婚生活6か月で出征して29歳で戦死した。召集令状が

来る前に庄吉は、この家に60点に近い作品の石膏像を送っていた。その一つ一つが等身大の裸像で、作られた作品だったが、いつか散乱して、残っていたのは庄吉が出征前の3日間、寝る間を惜しんで最後の仕上げをして完成させた夫人の像だった。その像の前に端坐すると、「こつこつ」と石を刻む音が聞こえた、という。

戦没画学生の絵を無言館に集めている窪島さんが「石屋の音」を読んでいるはずはない。岩内の丘に碑の建つ日が待たれてならない。